

審査の結果の要旨

氏名 梅垣 佑介

うつ病・自殺による経済損失が 2.7 兆円（厚生労働省 2010 年）とされる今日、うつ病・抑うつ（depression）の問題改善は社会的課題となっている。うつ病・抑うつの治療や援助については、薬物療法に加えて認知行動療法等の心理社会的方法の効果も実証されている。しかし、援助を必要とする者に対して適切なサービスが提供されていないサービス・ギャップが存在し、問題の改善が進んでいない。そこで、本論文は、援助要請行動に焦点を当て、ギャップ解消のための知見を得ることを目的とした。論文は、問題の背景としてうつ病罹患者の援助要請行動を検討し、研究課題を明らかにした第 1 部（1-2 章）、うつ病の問題認識が生じる認知プロセスを質的に検討した第 2 部（3-5 章）、援助要請における認知バイアスを量的に検討した第 3 部（6-9 章）、受療と関連するインターネット検索行動を検討した第 4 部（10 章）、研究を総括する第 5 部（11 章）から構成されている。

第 1 章でうつ病・抑うつを取り巻く現状を概観し、治療・援助サービス改善のため援助要請概念に着目する意義を述べた。第 2 章で援助資源のマッチングに向けて援助要請促進の知見を得るといふ研究の目的と方法を明らかにした。

第 3 章ではうつ病の問題認識に関する文献研究を行い、第 4 章でうつ病罹患者 11 名の面接データを質的に分析し、「違和感の認識」「異常性の認識」「ストレスとの関連付け」「うつ病かもしれない自覚」「受療必要性認識」から成るプロセスモデルを生成した。第 5 章では 12 名の面接データを質的に分析し、周囲の働きかけが受療を促進するとの示唆を得た。

第 3 部では若年者（大学生～30 代）を対象とした場面想定法による質問紙調査を実施した。第 6 章では抑うつ症状を呈した際の援助要請意図を検討し、自己のリスクを楽観的に評価する認知バイアスが確認された（ $N=462$ ）。第 7 章ではインターネット調査（ $N=850$ ）により、抑うつ・不安傾向や孤独感と自他に対する援助要請意図との関連を明らかにした。第 8 章では、抑うつ傾向のある者においても楽観的認知バイアスが認められ、認知バイアスがうつ病罹患者の受療行動の妨害要因となっていることが示唆された（ $N=471$ ）。第 9 章では、若年者コホートを対象とした 6-8 章の調査結果の一般化可能性の限定を論じた。

第 10 章では、抑うつ症状関連検索語を多次元尺度構成法により分類し、経済指標との相関を検討した。経済状況悪化と連動して「身体」「感情・精神」関連語の検索ボリュームの増加が明らかとなり、両関連語が治療・援助ニーズを反映している可能性が示された。

本論文は、うつ病・抑うつの問題認識プロセスを多角的に検討し、問題への気づきにおいて当事者と周囲との間で認識のズレ（相対的な楽観性）があることを明らかにし、そのような楽観的認知バイアスが援助要請行動を妨げる要因になっている可能性を実証的に示し、さらに検索行動に関する研究からインターネットを利用した予防的アプローチ展開の可能性を明らかにした点で特に意義が認められる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。